Coral sea reef guide.—B. Halstead. 2000. Sea Challengers, 321 pp. ISBN 0-9700574-0-7. 44.95 US $. 今まで2種類のガイドブック（紅海,1998/インド洋,1999）を出してきたダイヴァー，ヘルムート・デベリウス監修の最新刊である．今回グレイト・バリア・リーフ，パプア・ニュー・ギニアからニュー・カレドニアまでのサンゴ海に棲息する動物，約1000種を収録している．美しい海底写真に簡潔な解説で，著者自身が発見した種類も掲載，今話題のピグミー・シーホース，ミミック・オクトパス（2種），全身真っ赤な毛に被われたゴースト・パイプフィッシュの1種など，かなり稀な動物も登場する．ヤスジチョウチョウウオ，バージェス・バタフライフィッシュ，コリンズ・ピグミー・エンジェル，新しい*Hoplolatilus pohle*など，同海域の魚類図鑑（ランドールら，1997）とは異なる種類もあり，著者がカヴァーした海域はやや広く，ビスマルク海も含めている点は誤解を招くかも知れない．写真には撮影場所を付けているが，中には海域から逸脱した場所で撮った写真もある．著者が述べている通り，ユージニ・クラーク，ジョーン・ランドールなどが種の判別に関与しているが，中にはランドールが認めない名前（*Centropyge woodheadi*）もあると言う．監修者の意見を採り入れた結果であろう．ダイヴァー間で話題のポビット・ワームや，人気のエビ・ウミウシ類の紹介も多く，無脊椎動物に1000頁も割き，その分ベラ，スズメダイ，ブダイの項にはやや物足りなさを感じる．学術的な価値はあまり認められないが，1000ものポピュラー種を，実にコンパクトにカラー写真で収めた本シリーズは他に類を見ず，ダイヴァーやアクアリストにとって，今後に期待が持てる．

（田中宏幸）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
47(2): 145–148

中野　繁氏を偲ぶ
Memoirs of Dr. Shigeru Nakano (1962–2000)

いまだに信じられない．まさか，なぜ，という言葉をあの日以来私たちは何百回繰り返しただろうか．2000年3月27日（日本時間同28日），京都大学生態学研究センターの中野　繁助教授を含む9人の研究者を乗せた全長7.6 mのボストン・ホエーラー型のモーターボートがメキシコ（バハカリフォルニア）のコルテス海に面するバイア・デ・ロサンヘレスの沖合いで高波に呑み込まれ転覆した．中野さんらは，カリフォルニア大学デービス校のゲーリー・ポリス教授率いる陸域（砂漠）と水域（海洋）の生物の相互作用の研究チームに同行し，現地調査を見学中だった．数時間の漂流を経て4人は自力で近くの島に泳ぎ着き翌朝救助されたものの，ポリス教授，京大生態研センターの安部琢哉教授および東　正彦教授ら4人が亡くなり，中野さんは行方不明となった．船には十分な数の救命胴衣が準備されていなかったという．メキシコ海軍等による懸命の捜索にもかかわらず，今日に至るまで中野さんの消息はいまだに不明である．事故当時の状況の詳細が未だに明らかにされていないものの，その後の時間の経過からこのたび死亡認定が下されて諸般の手続きがとられることになった．まことに痛恨のきわみであるが，ご家族，また私たちも，心に区切りをつけなければならぬ時がきた．中野さんは37歳の若さだった．

私は1995年から1999年までの間，北海道大学農学部附属苫小牧地方演習林において博士後期課程の学生として中野さんの指導のもとでイワナ属魚類の種間競争の研究に携わった．中野さんは「先生」と呼ばれるのを好まず，しがたってそう呼ぶ学生もいなかったので，ここでもそれに準じ，他の諸先生方も「さん」付けでお呼びすることをお許し願いたい．

1999年10月10日，苫小牧の樽前神社にて七五三のお参りをする中野さんと妻の弘美さん，お子さんの菜奈ちゃん（7歳），憧弥くん（5歳），湧弥くん（10カ月）．

中野さんは1962年11月25日に岐阜県神岡町に生まれた．ご両親の経営する日本料理店の板前さんは無頼の生き物好きだったそうで，中野さんを幼少の頃から膝の上であやしながら，魚や鳥の話をしてくださったという．特に魚釣りが得意だったその板前さんの影響で中野さんも魚や釣りが好きで，小学校1年生のときの将来の夢は水族館の館長だった．運動会ではリレーの選手に選ばれたのはいいが，バトンを手渡されたかと思うとトラックを反対方向に走り始め，しかし間違いに気づいたあと全速力で駆け戻り，それでも一等になったのも小学校1年生のとき．小学校高学年の頃，なぜか急におしゃれに目覚め，ハンティング帽をかぶったり，真っ赤なシャツを着てみたりする，おませな子供だったようだ．それは，中野さんの野外調査に使っていたテント，雨具，靴などどれをとってもアウトドアメーカーの一流品で，デザインや素材などに大変うるさかったことと通じているような気がする．また，中野さんは小学校時代学校での勉強が嫌いで，中学入学までに学習ノートを1冊も持たなかったが，ご両親も特にそれについて何も言わなかったという．自由奔放を絵に描いたような子供時代の中野さんは，そのまま大人になっても変わらなかったことに妙に納得のいく話である．中学時代の中野さんは，短距離走の陸上選手として活躍しながらも，極真会空手などの武道に熱中する少年だったという．いずれにしろ，中学一年生のときにイワナの個体間に順位があることを自らの観察で明らかにし，将来はイワナの研究者になることを決めていたということからも，渓流とそこに生息する生き物を教科書に育った中野さんの少年時代が浮かんでくる．

中学卒業後の中野さんは，東京の私立城北高校に進学した．同級だった秋山芳晃さん（現国立大蔵病院医師）は，「当時生物学の担当の講師と中野さんは高校1年の頃から生態系や進化についてハイレベルな討論をかわしており，先生にとって中野繁は生徒の枠を越えた“別格”の存在だった．」と語る．同じく同級生だった久下敏宏さん（現群馬県水産試験場研究員）によれば，中野さんは，雑誌「アニマ」に河川性サケ科魚類の生態に関する記事などが掲載されるとむさぼるように読んでいたというから，故郷の渓流やイワナから遠く離れながらも心の中にはいつもイワナがすんでいた姿が見えてくる．高校卒業後，三重大学水産学部に進学した中野さんは，そこで河川性サケ科魚類の研究者としての第1歩を踏み出すことになる．同学年だった徳田幸憲氏（現岐阜県高原川漁業協同組合研究員）によれば，入学当初はラグビー部に所属したものの1年余りで辞め，もっぱら仲間とともに川の魚や水生昆虫を捕獲したり水中写真を撮ったりする日々をおくるようになったという．名越誠さん（現奈良女子大名誉教授）の研究室の門を叩き，定期的な魚類調査に参加し始めたのも丁度この頃らしい．卒業研究のために平倉川で本格的にデータを取り始めたのは大学3年の後期．名越さんと共に発表した，アマゴ個体群における密度効果と成長様式に関する論文が，中野さんが世に問うた初めての論文となった．同大学の水産学研究科大学院に進学した中野さんは，渓流域におけるアマゴの順位社会と空間および餌の利用に関する研究を行い，1987年に修士課程を終えている．中野さんは，修士課程在学中にアマゴやイワナの個体識別に基づく詳細な記載的研究を行う一方で，京都大学理学部の川那部浩哉さん（現琵琶湖博物館館長）率いるタンガニーカ湖の魚類調査研究チームに参加し，アフリカン・シクリッドの種間関係の研究にも携わった．アフリカの現地ではマラリアにかかり一時は生死をさまよったこともあった．このころの研究は，川那部浩哉さんや田中哲夫さん（現姫路工業大学助教授）らによる詳細な個体レベルの行動研究に強く影響を受けていたと言ってよいだろう．同年，故郷に戻り，高原川漁業協同組合嘱託研究員となった中野さんは，10月，幼なじみでもあった弘美さんと結婚している．当時の中野さんは，夜のフィールド調査でよく弘美さんに手伝ってもらい恐い思いをさせ随分迷惑をかけたと述懐していた．1988年，漁協を退職，飛騨・北アルプス自然文化センター学芸主事となるものの，北海道大学で開かれた国際イワナ学会にて研究発表した際に，当時の北海道大学農学部教授であった石城謙吉さん（現同大学名誉教授）の目にとまり，翌1989年に北海道大学農学部附属中川演習林に助手として迎えられた．ここに中野さんの大学研究者としてのキャリアがスタートすることになる．この頃を境に，中野さんは前川光司さん（現北海道大学教授）や後藤　晃さん（現北海道大学助教授）をはじめとする進化・繁殖生態学研究者らと深い交流を結ぶようになり，後の研究に大きな影響を受けた．転機となった国際イワナ学会では，カート・ファウシュさん（米コロラド州立大）とも出会っている．ファウシュさんはその後の中野さんの研究キャリアにおけるキーパーソンの一人であり，その後十数年にわたり両者はフィールドを共にしてきた．当時，米コロラド州立大学に留学中だった私はまだ中野さんを知らなかったが，ある時ファウシュさんから「優れた日本人研究者との共同研究」の話を聞いた．それが中野さんだった．「20代の若さでありながら，世界のサケ科魚類の研究者の誰にも負けない素晴らしいデータを持っている．野外調査に優れ，凍るように冷たい渓流の水の中で何時間にもわたって潜水観察ができ，野外で作る料理がまたプロ級だ．気さくで顔が広くいつも多くの研究者仲間に恵まれている．」，こんなことを我がことのように得々と話しておられたのが印象に残っている．

演習林勤務の傍らで中野さんは，日高山脈を流れる新冠川ポロシリ沢にてイワナ属の種間競争に関する研究に没頭し，延べ数百日にも及ぶ潜水観察を行い，オショロコマとアメマスの資源分割と共存機構について明らかにした．これらの研究成果が認められ，1991年に北海道大

学より農学博士を取得した．この頃，中野さんの河川性サケ科魚類の研究フィールドは国外にも広がっていった．1990年より1994年にかけてアメリカのアラスカ州，モンタナ州，ロシアのカムチャツカ，サハリンなどでオショロコマ，ブルトラウト，ギンザケ，サクラマス，*Brachymystax*属などを材料に繁殖生態，種間関係，種分化など多岐にわたる分野で研究の才能を開花させていった．またこの間，中野さんは数多くの大学生，大学院生を指導し始め，第2世代の育成にもつとめた．このような嵐のように激しい研究人生の中でポッと花の咲くような出来事もあった．1992年に長女の菜奈（なな）ちゃんが，つづいて1994年に長男憧弥（しょうや）くんが誕生したことである．研究者としての厳しい一面を持つ中野さんだったが，海外出張すると弘美さんにワンピースを買ってプレゼントする愛妻家であり，また菜奈ちゃんと交換絵日記をするなどの子煩悩な父親としての一面をものぞかせていた．

中野さんは30歳ごろからすでに学会で座長を務めていたのを思い出す．口頭発表にも大変優れていた中野さんのその流れるようなプレゼンテーションに私たち学生はいつも魅了されていたものである．発表者に対して中野さんは容赦なく鋭い質問を浴びせることもあったが，必ずといっていいほど質問をした後で，相手に歩み寄り，丁寧に自分の質問の意図を説明し議論を深めていた姿が今も印象に残っている．

1995年，中川演習林から苫小牧演習林に異動となり，研究にも大きな転換を図っている．この頃の中野さんは，「オレはもうイワナ中心の研究はやめるから．」と周囲に言って驚かせた．しかし，当時中野さんが演習林内を貫流する幌内川にて展開し始めていた研究を間近に見た誰もがその言葉に納得したことだろう．そこは河川生物群集の形成機構，河川－森林生態系での生物間相互作用，生物多様性の維持機構の解明などに主眼をおいた，壮大な「屋根のない実験室」となっていた．河川をビニールハウスですっぽり覆うことにより，河畔林からの陸生無脊椎動物などの供給を遮断した結果，河川性サケ科魚類（オショロコマ）を高次の栄養段階とする河川内の生態系が大きく改変されるメカニズムを明らかにし，国際的にも高く評価される研究となった．実に，中野さんは研究のアイデアの宝庫だったといえる．毎日と言ってよいほど次から次に湧いてくるアイデアを包み隠さず，興奮気味に私たちに話してくれた．朝，決まって中野さんが歌いながら演習林の建物に入ってくるのが学生室にいる私たちには聞こえてくる．それらは，オフコースや薬師丸ひろこが歌う一昔前の歌謡曲だったり，あるいは，忙しい中でいつの間に覚えたのかと驚くような最近のアイドル歌手による流行歌だったりした（余談だが，唄が上手だった中野さんがカラオケに行くと必ず歌う曲がいくつかあり，私のお気に入りはThe BOOMの「島唄」であった）．中野さんは，学生室に入ってくるなり朝から高いテンションで，「また新しい研究テーマ思いついちゃった！」の言葉の次に「香り高いもの入れようぜ」と自分の話の前に学生にコーヒーを催促するのも忘れない．新しい研究のアイデアはどれもユニークで，奇想天外とも言える実験方法などにはいつも感心させられたものである．さらに驚くべきことは，その研究をほとんど言ったその日のうちに実行に移してしまう決断力と行動力だった．また，中野さんは論文の執筆に関しては実によく指導してくださった．それはいったん始まると必ずと言って良いほど翌日の明け方まで続き，学生はみな中野さんと並んでコンピュータの前に座り，議論を交わしながら論文執筆を進めていくのだが，次から次に中野さんがふかすタバコの煙に燻されながらも背筋を伸ばして指導を受けていた私たちの姿はどれも苦行僧のように見えたことだろう．

当時の苫小牧演習林にいた私を含めた学生の多くが，中野さんの研究にかける情熱とその激しさに当初は戸惑いを覚えていたのをいまではなつかしく思い出す．なにしろ，中野さんの口癖は，決まって「おまえら血吐くまで研究しろ」，そして，「ぜったい寝るなよ」だった．実際に，野外実験に取り組んでいた大学院生が降り続いた雨による増水で，河川内に仕掛けた囲い網（エンクロージャー）のメンテナンスを寝ずに続けた結果，朝まで戻ってこなかった話は今では伝説的になっている．中野さんの怒鳴り声は雷級で，ある時，突然発せられた罵声に対して，「そんなに怒らないで下さいよ」と言ってみたことがある．すると，中野さんからは「怒ってるんじゃない，オレはエキサイトしているだけだ」という答えが返ってきたこともあった．私たちは，中野さんのように研究に対して激しい情熱を表現し，自らも寝る間を惜しんで研究に打ち込む研究者を彼以外に知り得ない．苫小牧演習林において中野さんが始めた森林と河川の相互作用の研究の黎明期とも言える時期に居合わせた学生の多くは，ともすれば強引な指導のやり方に反発しつつも，その圧倒的な情熱とパワー，そして何よりも創造的で，すべての研究者に夢を与えるようなスケールの大きな研究に惹かれ，いつの間にか自らも同化していったのではないだろうか．そこに，まさに「中野スクール」という異名をとる所以があったのだと今さらながら思うのである．

中野さんは私たち学生に論文の執筆は「パズルみたいなものだ」と言っていたことがある．一見散らばってしまって全体像が見えにくくなっている複雑な研究結果をいともたやすく一つにまとめ上げ，美しい論理構成を創出するマジックを中野さんは身につけていた．ともすれば複雑で難解な生き物たちの世界という名のパズルの解き方を中野さんは教えて下さった．こうして，中野さんが著した学術論文は70篇を越え，1998年度の日本生態学会宮地賞を受賞する栄誉にも輝いた．これら学術論文のみならず，高校現代文の教科書をはじめ，テレビ，新聞，雑誌など多種多様な一般向けメディアにおいても中野さんは淡水魚の生態を分かりやすく解説することにつとめていた．1998年に助教授に昇任した中野さんは，そ

の夏，一転してマレーシアの熱帯雨林を流れる河川の生物群集に興味を持ち，調査を開始している．さらに翌1998年4月1日付けで苫小牧演習林の林長に就任，そして，その年の11月には，3番目のお子さん，湧弥（ゆうや）くんが誕生した．

1999年，北大を後にし，京都大学生態学研究センターに助教授として着任した中野さんは，地球環境科学総合研究所の発足に向けその準備に奔走し，その一方でロシアのバイカル湖において生物多様性に関するプロジェクトを開始していた．事故はそんなときに起こった．事故直後に京大関係者およびご家族らとともに現地バイア・デ・ロサンヘレスの砂浜に立ち，はるかな海を臨んだとき，私たちの目の前にはその「天使の湾」の名が示すとおり天国のように穏やかな楽園がそこには広がっていた．青く濃い空には何百ともしれない白いカモメが舞い，濃紺の海にはクジラが群をなして泳いでいた．そこには事故当時の嵐のすさまじさを示す片鱗さえなく，砂漠から吹く乾いた風が穏やかに海の上を渡っていた．その夜，私の夢のなかに中野さんは現れた．いつもの黒いRV車に乗った中野さんが苫小牧演習林に通じる細い道をゆっくりとやってくる．運転していたのはなぜか弘美さんである．車が止まる．おもわず，「中野さん，生きてたんですか！」と開いた助手席の窓に駆け寄ると，「オー，当たり前だ」と元気そうに答える中野さん．「じゃあ明日からもう（演習林に）出てきますか」と聞くと，「無理に決まってるじゃねえか」と茶目っ気たっぷりに，相変わらず少し乱暴気味な返事を残し，車はそのまま静かに走り去った．朝，ホテルのベッドの中で太陽の光に夢を蹴られ，思わず窓の外を見ると，神々しい夜明けが海と島々を包んでいた．

事故から数カ月という時が流れ，今さらながら，なぜ中野さんからもっと学んでおかなかったのか，と後悔の念にかられるのは私だけではない．中野さんは，京都に移った後も北海道に残してきた学生の論文指導を忘れてはいなかったし，事実，就職した元学生にまで励まし（論文催促）の電話を頻繁にかけてきた．ある時，中野さんとの共著論文で約束の期日を守れなかったので，忙しさにもかこつけて私が電話にでなかったことがあった．すると，しびれを切らしてか電子メールが来た．件名は「論文，論文，論文」となっていた．恐る恐る開いて中を見てみると，「ふだん忙しいのなら寝ずにやってください．私もそうしています．」と書かれていて再び恐縮したものだった．私が中野さんに電話をかけると，ふざけて私の勤める大学の事務職員の女性の声をまねて出ることがよくあった．いまでは，もう中野さんからの電話もないし，ふざけて電話に答える人もいない．中野さんがいない，という事実はともするといとも簡単に私たちを過去に引き戻してしまう．しかし，中野さんがこれまで私たちの大きな目標であり，そして，これからもずっとかけがえのない目標として私たちの心の中で生き続けていく以上，中野さんは遠くから私たちの研究活動を見守り続け，時には叱咤激励してくれるに違いない．中野さんが志なかばにして果たせなかった研究は，幸いにして国内外の多くの共同研究者をはじめ，私たち十数名の弟子たちが引き継いでいくことができる．一人一人の力は中野さんに及ばないが，力を合わせればきっとやり遂げられるだろう．その中で，私たちは，折に触れ，中野繁という人と出会えたこと，そして彼の激しいまでの生きざまと死について語りあっていくことだろう．

（谷口義則　Yoshinori Taniguchi: 〒753-8502 山口市桜畠3-2-1　山口県立大学生活科学部　Faculty of Life Sciences, Yamaguchi Prefectural University, e-mail: ytani@ws1.yamaguchi-pu.ac.jp）

魚類学雑誌
47(2): 148-150

世界の博物館
Museums of the world

現在，魚類の分類学的研究を行うにあたって模式標本の調査は必要不可欠である．近年，模式標本の郵送での貸出しを行わない博物館が増えてきており，今後もこの傾向は高くなるであろう．しかし，最近の航空運賃の格安化に伴い，学生でも容易に各国の博物館を訪れることが可能になった．そこで，私が最近2年間で訪問した12ヶ所の博物館の現状を紹介する．以下の情報が，今後これらの博物館を訪れる若手研究者にとって参考（滞在期間，時間配分，および仕事量の決定など）になれば幸いである．

フランス，パリ市内のJardin des Plantes（植物園）の敷地内にあるMuseum National d'Histoire Naturelle (MNHN [contact person: Mr. P. Pruvost, pruvost@cimrsl.mnhn.fr; Prof. J.-C. Hureau, hureau@mnhn.fr])は分類学ではなじみの深いLacèpede, Cuvier, およびValenciennesなどの標本が多数保管されている．MNHNは訪問者のための小さな部屋が1つ用意されており同時に3人までは滞在可能だが，実体顕微鏡が1つしかないためうまく時間を使わなくてはならない．部屋の利用時間は基本的に朝9時から夕方6時までであるが，部屋のロックの暗証番号を教えてもらえば24時間使うことが可能である．また，標本室はMNHNの建物から約500 m離れたJardin des Plantes敷地内の地下にあるため，MNHNに訪れた最初の日に標本室から見たい標本を全て運び出した方が無難であろう．大部分の標本瓶の口は石膏やロウで塞がれており，さらに猫の内臓を乾燥させたものでカバーされている．これらを取り外すのは非常に骨が折れ，

1瓶でも5–15分はかかる．

オランダのライデン市内にあるNational Museum Natural History (RMNH [Dr. M. J. P. van Oijen, oijen@naturalis.nnm.nl]) は1997年9月に移転した (1998年4月に開館；現在のpostal address: P. O. Box 9517, 2300 RA, Leiden). 20階建のライデン市内で一番高い建物であり，Leiden central駅から徒歩5分．ここはBleeker, Temminck, およびSchlegelなどの標本が多数保管されている．RMNHには訪問者のための部屋は無いが，2階のcollection managerがいる部屋を使わせてもらえる．部屋の利用時間は朝8時から夕方5時半までで夜は使用出来ない．建物の20階に液侵標本が，8階に乾燥標本が保管されているが，移転して間もないため乾燥標本は未だきちんと整理されていない．なお，宿はLeiden UniversityのInternational Centerを予約してもらうと良いだろう．International CenterからRMNHまでは徒歩で15分くらいかかるが，1人1泊35G（＝約1700円）と安い．

オーストラリアのシドニー市内にあるAustralian Museum (AMS [Mr. M. McGrouther, markm@austmus.gov.au]) は，訪問者専用の部屋はないが標本室の前に少しスペースがあり，そこを使わせてもらえる．標本室は2つ (Spirit houseとAnnexe) に分かれており，1つはYorong Street Building（オフィス）の隣Spirit houseの4階，AnnexeはYorong Street Buildingから道路を挟んだ側面にある建物．数ヶ月後にはAnnexeの標本は全てSpirit houseの4階に移される．さらに研究棟から交差点を挟んだ斜め向かいのビルの1室に昨年AMSのオフィスが出来た．落成のパーティが新しいオフィスで行われ私も参加した．AMSは正式には朝7時45分から夕方6時までがスタッフの働く時間帯となっているが，現状は朝9時から夕方5時まで．

オーストラリアのブリスベン市内にあるQueensland Museum (QM [Mr. J. W. Johnson, JeffJ@qm.qld.gov.au]) は，訪問者専用の部屋はないがcollection managerの部屋を使わせてもらえる．机や実体顕微鏡も同様にcollection managerの物を利用させてもらわなければならないため，1日に調査・測定出来る標本の数は限られてくる．また，fish sectionはcuratorやtechnical officerがいないため全てcollection manager 1人で対応してくれる．オフィス，標本室はともにQM buildingの6階にある．スタッフの働く時間帯は正式には朝8時から夕方6時までだが，現状はAMS同様朝9時から夕方5時まで．なお，QMの住所は1986年10月に変更された (Grey Street, South Brisbane [postal address: PO Box 3300, South Brisbane, Queensland 4101]) ため，世界の研究機関の略称および住所が記載されたLeviton et al. (1985) に載っている住所は変更前のものであり注意が必要．

オーストラリアのダーウィン市内にあるMuseums and Art Galleries of the Northern Territory (NTM [Dr. B. Russell, Barry.Russell@DWNMUS.DAM.nt.gov.au; Dr. H. Larson, Helen.Larson@DWNMUS.DAM.nt.gov.au]) は，訪問者専用の部屋はないがtechnical officerの部屋を使わせてもらえる．スペース，実体顕微鏡の数ともに十分である．標本室の入室には前もって許可が必要であり，NTMを訪れた最初の日に標本室から見たい標本を全て運び出さなければいけない．スタッフの働く時間帯は朝8時から夕方4時30分までであり，朝10時はNTMの職員の大部分が集まってのコーヒータイムである．なお，現在全ての液浸標本をNTM裏の新しい標本室に移動中であり，8月下旬に全ての標本の移管が終了する．また，事前に連絡するとNTMの船，投網，および引き網などを利用させてもらえる．これらを利用したダーウィン周辺での標本採集はかなり面白い．

オーストラリアのタスマニア島ホバート市内にあるCommonwealth Science & Industrial Research Organization (CSIRO [Mr. A. Graham, Alastair.Graham@marine.csiro.au]) のDivision of Marine Research内にISR Munro Ichthyological Collectionがある（Dr. Munroが設立し，彼が退職した1984年に現在の名前となった）．訪問者用のスペース・実体顕微鏡は十分にある．また，X-ray写真も撮ることが出来る．スタッフの働く時間は朝9時から夕方5時までであるが，施設は24時間使うことが可能である．また，簡単な手続きをすれば土日も利用可能である．ISR Munro Ichthyological Collectionは1985年にキャンベラから移転した (GPO Box 1538, Hobart, Tasmania 7001) ためLeviton et al. (1985) に載っている住所は変更前のものであり注意が必要．また，標本の整理は未だに出来ていない（模式標本は整理済み）．

アメリカ合衆国のワシントン市内にあるNational Museum of Natural History, Smithsonian Institution (USNM [Ms. S. L. Jewett, Jewett.Susan@NMNH.SI.EDU; Ms. L. Palmer, Palmer.Lisa@NMNH.SI.EDU]) は訪問者専用の部屋・スペース，実体顕微鏡などが十分にある．スタッフの働く時間帯はまちまちだが，土日を含めて24時間利用することが出来る．また，日本語を話せるスタッフもいるので心強い．模式標本の貸出しは行っていないが，全ての模式標本のX-ray 写真が既に撮られているので (X-ray 写真は貸出しOK) 外部・内部形質ともにその場でチェックできる．また，膨大な標本は模式標本と一般標本に分けてあり，科ごとに学名のアルファベット順に並べてあるので目的の標本を比較的容易に見つけることが出来る．USNMについてのより詳しい情報は魚類学雑誌29巻2号237–240頁を参照．

アメリカ合衆国のシカゴ市内にあるField Museum of Natural History (FMNH [Ms. M. A. Rogers, rogers@fmnh.org]) は訪問者専用の部屋・スペース，実体顕微鏡などが十分にある．私が滞在した時は4人の訪問者が来ていたが，それでも研究するスペースは十分に残っていた．スタッフの働く時間帯は朝8時から夕方4時30分まで．FMNH内はレストラン・ハンバーガー屋など充実し

ており，食事には困らない．また，展示物（動植物・化石など）も充実しており一見の価値がある．

中国の上海市内にあるShanghai Fisheries University (SFU [Prof. H.-L. Wu]) には訪問者用の部屋はあるが，実体顕微鏡は古いものが1台あるのみである．部屋を使用出来る時間帯は特に決まっておらず，事前にここの管理者（教授）と話し合い，承諾を得なくてはならない．

インドのカルカッタ市のIndian Museum内にあるZoological Survey of India (ZSI [Dr. A. K. Karmakar, Fax +91-33-4006893]) は多数の模式標本を有する．ここは標本の借用が出来ないので，ZSIの調査はインド-太平洋域の魚類を研究する上で必要不可欠である．訪問者用の部屋・スペースは十分にあるが，実体顕微鏡が無いため，持参した方が良いだろう．ZSI訪問にあたっては訪問日の約1ヶ月前にcuratorにコンタクトをとる必要がある．インドは電話および郵便事情が極めて悪いことから，事前の連絡はEMSとファックスの両方を同時に行った方が良い．なお，その時に自分が調べたい標本を全て明記・伝えておかないと，訪問しても見せてもらえないことがあり，注意が必要．部屋の利用時間は決まっておらず，curatorと話し合って決める必要がある．大抵は朝11時から夕方5時まで．

インドのチェンナイ市（＝マドラス市）内に隣接してMarine Biological Station, Zoological Survey of India, India (ZSI/MBS) とSouthern Regional Station, Zoological Survey of India, India (ZSI/SRS [Dr. K. Rema Devi, Fax +91-44-4942898])があり，実体顕微鏡も備わっている．ここもカルカッタのZSI同様の方法で事前にコンタクトをとる必要がある．

（本村浩之　Hiroyuki Motomura: 〒889-2192 宮崎市学園木花台西1丁目1番地　宮崎大学，鹿児島大学大学院連合農学研究科e-mail: a02113u@cc.miyazaki-u.ac.jp）

魚類学雑誌
47(2): 150

国際動物命名規約第4版　日本語版の出版

「国際動物命名規約第4版日本語版」が「日本動物分類学関連学会連合」から出版された．英仏版の第4版規約は今年の1月1日から発効しているが，この版から動物命名法国際審議会の認定を受けた各国語版も，「英仏語版と同等の効力と意味と権威を有する正文である」ことが規定された．このほど出版された日本語版は，今年の7月17日付で同審議会から正文であるとの認定が得られているので，今後は日本語版の条文に基づいて命名法上のさまざまな処理が可能になる．日本語版の出版により難解な英仏語版の条文から解放されることは，個々の研究者のストレスを軽減するばかりでなく，魚類を含む動物分類学の普及にも貢献するであろう．

日本語版はB5判，152頁，クロス張ハードカバーで価格は3000円（送料込み）である．ちなみに，頒布価格の半分近くはロイヤリティーとして，版権を持つ動物命名法国際信託に支払われる．大きい財政赤字を抱えている同信託の援助にもなるので，この機会に多くの会員が購入して下さるようお願いする．

頒布価格を低く抑えるために購入方法をなるべく簡略にしている．購入を希望される会員は，下記へ電子メールかファクスでご連絡いただきたい（電話での問い合わせは避けていただきたい）．電子メールをお使いの会員はファクスではなく，必ずメールをお使いいただきたい．購入申し込みの際は，(1) 氏名，(2) 送付先住所，(3) 所属機関名，(4) 電話番号，(5) 購入部数，(6) 公費払いの場合には必要書類と通数，宛先および日付の記入方法，をお書き下さい．

購入申し込みおよび問い合わせ先：tomokuni@kahaku.go.jp（ファクスの場合には03-3364-7104：担当国立科学博物館動物研究部　友国雅章）

（松浦啓一　Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館動物研究部）